

目丸潰れ、といった事になりかねない。事実この新しい入試システムが導入された当初、そういった外交機関からのクレームが押し寄せた時期があった。

受験の条件は十六歳以上、という事のみで、それ以外は国籍、性別、学歴など要項に書き入れる欄こそあるものの、一切不問である。準備すべきはピアノ科の場合、バッハの作品、クラシックのソナタ、ショパン程度の練習曲、ロマン派の作品、今世紀に作曲された作品から各一曲ずつ計五曲を暗譜で、というもの。まづ簡単な楽典の常識テストが筆記であったのち、準備した曲から抜粋で一人ずつ十分間程度演奏する。入試は毎年九月。受験希望の人はそれまでにできる限りの準備を！

呼び屋

「マネージメント」「音楽事務所」というと、比較的安定したイメージである。一方、日本には「呼び屋」といわれる業務がある。これはその名の示す通り、外国よりアーティストを呼びコンサートを企画して儲けようとするもので、一般音楽事務所の経営上非常に重要かつ事務所のプレステージにも関わるものである。有名なアーティストを呼べればその事務所のイメージも上昇するが、ここで赤字を出してしまつては何にもならない。

日本の音楽マネージメントは国家などの公費による援助ゼロで営業している。したがって多大な経費をかけて準備を進めても、最後の土壇場になってから疾病などの不可抗力によるキャンセルが入ったりすると、事情によっては会社の存亡そのものを左右する程の赤字が出てしまう。

そのかわり思惑が一発当ると大儲けができる。以前ホロヴィッツの来日が初めて実現した折りなど招聘元

の某音楽事務所では笑いが止まらず、当人が帰って後始末をつけた後、社員全員でハワイへ慰安旅行に行ったという噂である。

最近では民間の会社が資金を出し、そのイメージアップをもくろむ「冠コンサート」というのが流行しているが、これがすべてのコンサートに適用されるわけにはいかない。またこのシステムでは担当事務所が負うリスクこそ軽減されるが、逆に自分ですべてを設定し、それに賭けてみるうまみもなくなってしまふ。

「経費」と一口には言うが、たとえばオーケストラを日本に招聘するにはどのような準備が必要なのだろうか。

著名オーケストラの演奏スケジュールは普通数シーズン先のもまで含めて計画されており、ひとつの団体を二週間から三週間にわたって拘束するためにはかなり早い時期、最低三〜四年前には準備を始めなくてはならない。その上日本は地理的にもヨーロッパやアメリカから離れた場所に位置するため、実質二週間の国内旅行で十回の演奏会、という内容であっても、契約上では前後の旅程も含めて二十日間ぐらいいはそのオーケストラを確保しない事には実現が難しい。

来日するプレイヤーはひとつのオーケストラで九十人から百人、それにオーケストラ専属のライブリアン、ステージマネージャー、アドミニストレーター、同伴の夫人等々総勢で百十〜百三十人の団体となる。アメリカのフィラデルフィア管弦楽団のように、楽団員が飛行機によって移動する際には、万一の場合に備えた楽団の規則に沿って必ず団員をパート・能力別に二分し、それぞれ別の飛行機に分乗させなければならぬ、といった事もある。その場合にはそれに見合う準備と手配が行われるが、人以外にも楽器の輸送とそれらに対する保険などを含め、旅費だけでも相当な金額となる。

オーケストラ来日の日程が本決まりとなった時点から、国内でのアレンジが開始される。地方公演を行な

うためにはその土地での主催者——新聞社や放送局、または民音、労音などをはじめとする任意団体——を捜し、交渉を行なう。旅行のルートと日程を定め、実際のコンサートの一年半ぐらい前から会場とホテルの予約をする。この際に主催者側が負担するホテル代は純粹に部屋代のみで、三度の食事その他の経費は団員の個人払いである。

そのため来日するのが共産圏のオーケストラの場合など、団員はそれぞれ自国より罐詰その他の食料品を、それこそ腰が抜ける程大量に持ち込む。日本で買ひ足すのはパンと果物程度にとどめ、ホテルの部屋でつましい食事をしては残ったお金でテレビやステレオを買ひあさる。その目的のためにはパンに塗るバターまで自国から持って来る、という涙ぐましい努力は、端で見ても気の毒になるぐらいだそうである。

一説によるとソ連には「ロシアの朝食」という名の罐詰があつて、団員達はどうもそれを朝に食べているようなのだが、これは日本では犬にやっても犬の方で迷惑そうな顔をする、といったしろものなのだそう。いづれにせよ食事時になると百人からの人間がホテルの部屋で一斉に旅行用電熱器でお湯を沸かし始めるので、必ずヒューズがとんでしまう。

もっとも言葉が通じないから、と三度三度ホテルのレストランで食事をしていたのではいくらギャラをもらっても赤字になってしまう。ギャラの面でもトップクラスに入るウィーンフィル、ベルリンフィル、ニューヨークフィルおよびパリ管の団員達でも、ホテルで食事をする時にはカフェテリアあたりですませる事が多いようである。

国内移動の際、人間はバスに乗ったり電車に乗ったりいろいろであるが、それに付随して団員の荷物のトラックが一〜二台、別に楽器運搬用トラックが一〜二台常に同行している。移動日に当る日の前夜十一時から十二時には荷物のコレクションを行ない、トラックは夜中のうちに出発する。次の日団員がホテルに到着した時にはもう荷物が部屋に入っている、という段取りである。

挙げ出せばきりがないほど細部に至るまでのアレンジと準備が前もって行なわれるが、招聘側が経済的にカバーしなければならぬのは、①公演のギャラ ②会場費や印刷宣伝費などのプロモート経費 ③旅費および荷物・楽器のトランスポート代 ④宿泊費 ⑤各種アルバイト料（通訳、裏方さんなど）が大きなところであろう。ギャラに指揮者やソリストの分まで含まれるかどうかはケース・バイ・ケースである。フランスのオーケストラの場合にはオーケストラ・ユニオンの要求により、旅行中は何の公演もない自由行動の日であっても、拘束料としての日当が演奏会のギャラとは別途に支払われなければならない。

ベルリンフィルとカラヤン、ウィーンフィルとベーム、ニューヨークフィルとバーンスタインといった組み合わせになると、一公演のギャラだけでもゆうに一千万円は越え、それに加えての諸経費は一回の日本旅行の全行程ではたちまち億単位のものになる。しかしベームとカラヤンは惜しくもすでに過去の人となってしまい、たとえ億兆の金を積もうとも、そのステージに接することはできなくなってしまった。

それに対して招聘元にとって収入となるものは、①入場料 ②プログラムその他に印刷する広告代 ③放送などの際の権利金 のみであり、チケット代で全経費の大部分を賄わなければならない。それにリスクと利潤を加算されたチケットが高額になるのも、考えようによっては無理のない事なのかも知れない。

オーケストラはまだこの程度で済むが、オペラを呼ぶとなるとオーケストラに加えて歌手、かつらに衣裳、大道具・小道具、コーラス、それに化粧係の裏方さんなども加わって大変な人数の団体となる。日本で今まで一番大がかりだったオペラ公演はポリシヨイオペラが初来日した際のもので、総勢四百五十人。全ての舞台装置をポリシヨイ劇場より持ち込んで行なったが、それでもさすがに舞台に出てくる馬だけは日本で調達したそうである。

余談になるが外国から大道具を持ち込む場合、日本の消防法に合わせて防煙加工（不燃加工）を施さなければ公共の場所での使用許可が下りない。この加工も経済的に大変しんどい物なのだそうである。